

特 42
4
448

漢路
教家信
吉野路
范大報
錦戶

訂
正
觀
世
流
謠
別
離
十
八
番

漢語



漢語
治まの國乃始也一や二く三漢語乃

神代成らん一ね二む三今よりはく

下也一倭を我者願の子細き



吉玉津嶋より赤穂結つての

又能決るあまのはきより漢語乃ま

よ後り神代乃古跡より一見をりや

とよみの紀の海や波吹上り
風も強く跡をける身真津舟楫
踏程あく極つまらなくお震し
侍りけり淡路方ききまきりく
急の程もまらなく淡路の國よ
いれ可なり人を侍神代乃古跡を尋
まやとそん人の神乃代れ跡を尋

海山の長岡よ波の淡路の
種を治めよまらなく苗代水も
豊あり又陰陽の神代より
今人界よまらなく山行草衣
國去の皆神の惠よ作り田乃
免侍りけりまらなくて千里
万里乃外にまらなく皆昔のしめ

あり院よ陰陽あり列すらく木火
土の情いさる事あり水乃情
ありくさる事ありと云う
物さたいたまふ世界たあうさうしえ
をいけあことりひま去治まりあ
物か生まる可成いけあまとい
則れ溪路乃田を初めと現りカア記

とみや二柱乃神乃あつて海鳴と
申も河一鳴乃すかといふ凡れ鳴始
ゆて大八鳴雲を流るり記乃因
伊勢志摩日向并西乃海峯
を作り出著日神月神蛭子そけ
乃をこ甲地神五代乃始めあらく
皆れ鳴よ出現仲あも皇孫八日

庚辰

七

向^ニ玉^ノ天^ノ降^リの^ニあ^リて^ニ地^ノ神^ノ來^リ四
乃^レの^ニて^ニこれ^ハ子^ノを^レ出^ス生^ミ矣^ハ有^リ經^ニ
手^ノ代^クと^ルや^ハ天^ノ下^ニを^レこ^シて^ニ居^ル事^ト
事^トと^ルて^ハ十^三万^六千^八百^余歲^ニ
こ^ノ目^モあ^ル王^子達^ハ代^々と^シ
乃^レの^ニ椋^ノ權^現と^シて^ハ影^ノを^レ有^リい^ハ
は^レあ^リい^ハさ^レる^ニの^ニ神^代も^ハ只^今の^ノ

玉^ノ去^ル成^リ天^ノ神^ノ乃^レ代^ノ道^直直^ニあ^リく
今^も始^メ成^リ秋^津例^ノ乃^レ君^レは^レ影^ノを^レ有^リ
か^レこ^ノ影^ノを^レと^ル日^ノから^レ再^レび^テ書^ク
乃^レ始^メあ^リお^シく^ハあ^ま乃^レ浮^橋の^ノ若^ク
を^レ引^クて^ハあ^ま乃^レ入^ルを^レあ^まく^ハあ^まん
乃^レこ^ノ浮^橋の^ノい^まと^ハあ^まく^ハあ^まん
乃^レの^ニ成^リ乃^レ神^代乃^レ鳥^羽玉^ノ乃^レ我^レ

表紙

黒髪を 乱すの結い定ゆよ
 よの二手松乃奇れよまき神元
 へしきしあまの素淡踏ふさうさう
 して天乃^{ラネ}戸を^フ流り^ト失ふまきりく
 安^{ヨシ}としても神乃世々くは来は
 あくくあまのまきりとくく^トの虚空よ
 お神樂乃月よ安^トしてまきり^トの氣

色^{イロ}の^ニい^ハる^ニあ^ハる^ニま^ハる^ニま^ハる^ニま^ハる^ニ
 ら^ニあ^ハる^ニあ^ハる^ニあ^ハる^ニあ^ハる^ニあ^ハる^ニ
 けせる白む乃段^トして^トの^ト淡踏^ト
 月雲乃あまの長^トおまの^ト縁^トの^トあ^ハる^ト
 神^ト流^トの^トあ^ハる^ト乃^ト浮^ト橋^ト若^トよ^トま^ハる^トく^トバ
 乃^ト流^トを^ト求^トめ^トえ^トら^トく^トま^ハる^ト乃^ト神
 と^トあ^ハる^ト乃^ト治^トま^トぶ^ト乃^ト常^ト立^トま^トる^ト

九

九

始より地の神の代表
同青も行君の代より青和老也
瓊神の杖奈の四の風吹乃
山の動瓊音以音有るの寺は磐云
く音松天乃浮橋乃其は出可音以
よ音る音く音と音成可音ある音と音なり
は音げ音一音辨乃志音たる音意音さ音り音て

下音橋音と音あり音一音段音漢路音よ音と音た音り音き音り
下音る音そ音浮橋乃下音あり音ん音 宮音殿音乃
乃有橋東西の海も音ん音く音と音し音く音り
南音北音の雲風を音は音り音て音 宮音殿音乃
う音浮橋を音立音渡り音ま音よ音る音の音袖
青音の音た音の音一音手音風音あり音る音新音り
乃時津風治まるハ殿乃戸

表六
下

月日とては、^{シテ}見せしむる者、^{シテ}幼少なる出家
仕、^{シテ}つらむる會下、^{シテ}便にあら
同立、^{シテ}中子とて、^{シテ}該令、^{シテ}やむる、^{シテ}つらむる
業、^{シテ}より、^{シテ}親、^{シテ}く、^{シテ}海、^{シテ}なる、^{シテ}某、^{シテ}る、^{シテ}余
甲、^{シテ}て、^{シテ}屋、^{シテ}け、^{シテ}方、^{シテ}可、^{シテ}し、^{シテ}る、^{シテ}久、^{シテ}母、^{シテ}望、^{シテ}む、^{シテ}る
何の爲、^{シテ}よ、^{シテ}業、^{シテ}ら、^{シテ}給、^{シテ}て、^{シテ}空、^{シテ}しく、^{シテ}る、^{シテ}只、^{シテ}今
し、^{シテ}ま、^{シテ}か、^{シテ}入、^{シテ}ま、^{シテ}の、^{シテ}依、^{シテ}より、^{シテ}つ、^{シテ}ら、^{シテ}し、^{シテ}親、^{シテ}の、^{シテ}敵、^{シテ}ら、^{シテ}

ふ、^{シテ}ら、^{シテ}む、^{シテ}ら、^{シテ}ぬ、^{シテ}ら、^{シテ}ん、^{シテ}敵、^{シテ}ら、^{シテ}極、^{シテ}極、^{シテ}神、^{シテ}妙、^{シテ}ら、^{シテ}唯
一人、^{シテ}の、^{シテ}程、^{シテ}よ、^{シテ}思、^{シテ}ひ、^{シテ}し、^{シテ}甲、^{シテ}斐、^{シテ}め、^{シテ}く、^{シテ}月、^{シテ}日、^{シテ}を
送、^{シテ}ら、^{シテ}る、^{シテ}良、^{シテ}身、^{シテ}法、^{シテ}ら、^{シテ}よ、^{シテ}善、^{シテ}法、^{シテ}を、^{シテ}入、^{シテ}り、^{シテ}て、^{シテ}一、^{シテ}は、^{シテ}
む、^{シテ}ら、^{シテ}く、^{シテ}去、^{シテ}れ、^{シテ}れ、^{シテ}ら、^{シテ}る、^{シテ}人、^{シテ}の、^{シテ}幼、^{シテ}少、^{シテ}なる、^{シテ}出家、^{シテ}の
身、^{シテ}を、^{シテ}く、^{シテ}は、^{シテ}福、^{シテ}よ、^{シテ}と、^{シテ}更、^{シテ}ら、^{シテ}く、^{シテ}て、^{シテ}ら、^{シテ}一、^{シテ}は、^{シテ}意、^{シテ}ハ
去、^{シテ}れ、^{シテ}ら、^{シテ}く、^{シテ}は、^{シテ}親、^{シテ}の、^{シテ}敵、^{シテ}と、^{シテ}く、^{シテ}ね、^{シテ}ら、^{シテ}る、^{シテ}不、^{シテ}孝
乃、^{シテ}由、^{シテ}と、^{シテ}ら、^{シテ}る、^{シテ}一、^{シテ}は、^{シテ}母、^{シテ}親、^{シテ}の、^{シテ}敵、^{シテ}と、^{シテ}討、^{シテ}く、^{シテ}孝、^{シテ}は、^{シテ}徳

大

二

分ちるるゆゆの中^レのゆ^ル唐土^ノ力^カを
 ちりて母と鹿^ノを敵^トとせしむ
 とく^レ百日^ノ伏野^ノ力^カを^レ出^シて^レ移^ルる
 又昔^ノ尾上^ノ松ノ木^ノ隱^レる^ル虎^ノ似^テる^ル大^ノ石
 ノ^レあり^テと敵^ト虎^ト思^フる^ルを^レ矢^ヲを^レ射^ス
 ち^レひ^ク放^シて^レ矢^ノ則^チと^レほ^シたら^バ血
 流^ルる^ルを^レ見^テも^レ孝^ノ乃^レ深^キよ^シと^レ

聖^ノ石^ノの^レ矢^ヲを^レ申^スる^ル思^ハる^ル人
 是^レも^レ面^ノ目^ノを^レ射^テる^ル家^ノ如^ク射^テる^ル
 法^ヲを^レ思^ハる^ルた^ラば^レ射^テる^ル人^ノ 射^テる^ル
 梅^ノ飯^ノ去^リて^レ射^テる^ル人^ノ 某^ノ也^ト
 在^ル業^ノ也^ト射^テる^ル人^ノ射^テる^ル人^ノ射^テる^ル
 家^ノの^レ福^ヲを^レ某^ノ家^ノに^レ射^テる^ル
 放^テ下^ノ僧^ノを^レ射^テる^ル人^ノ射^テる^ル人^ノ射^テる^ル由^ニ

上道は道法にあらむも好ましく

是の面白くもなるに思ふ

すまふも心ゆく思

多行勝の笑みも

思の放家は笑ふも

くも立ち居る古郷の名跡も

有命のついでに

限り先ず神は心ゆく

さき神壇もく

是相續の國は住人

わく并け同様に

傲られし場も

神も有様も

笑みも

口からいふに平力の殊教と云ふに纏ひ
 悉摩二体の意を悉羅障懺悔の袈裟
 と掛ては僧と申すは多敷の也との得
 ちては目下を指教と固して扱はる
 固の白紙を^{ニテ}支固く申す動く時に入
 清濁の^ノ教の時分より方人の^ヲ月信
 風雨同性の^ノありた^ク法^ノ信^ノと云ふ可作

上段

一五三十一

して^ハ可^クも^シ佛^ノの^ノ便^ノと^シ抄^スり^テ持^ツる^道
 神^ノと^シて^ハ何^レも^シら^ズに^ハ固^クなる^事
 面^ノより^ハ入^ルに^ハさ^ラず^ニ先^ニ先^ニ給^フ言^ハは^レる^僧
 乃^ハ道^ノか^らい^テか^らい^テ高^ク申^スは^レる^家ノ^鳥鬼
 乃^ハ姿^ノ像^ノと^シて^ハ日^ノと^シて^ハ愛^シ顯^ル淨^ノ穢^ノ不^レ二
 の^ノ秘^ノ法^ノと^シて^ハ表^スる^事も^シた^ルに^ハ深^ク見^ル神^ノ通
 の^ノ言^ノと^シて^ハ方^ノ便^ノを^シて^ハ念^ノと^シて^ハ念^ノノ^ノ用^ノ塵^ノノ

佛書

六

たふまふシテたふシテたふシテ梅ノ花ノ香ノ

乃シテたふシテたふシテたふシテたふシテ

物ノたふシテたふシテたふシテたふシテたふシテ

昔ノたふシテたふシテたふシテたふシテたふシテ

何ノたふシテたふシテたふシテたふシテたふシテ

乃シテたふシテ南ノ無ノ二ノ寶ノたふシテたふシテ

はシテたふシテたふシテ根ノ機ノたふシテたふシテ持ノ戒ノ破ノ

戒ノたふシテたふシテ有ノ無ノ二ノ偏ノたふシテたふシテ

々ノ皆ノ出ノ仁ノたふシテたふシテたふシテたふシテ

乃シテ草ノ木ノ露ノ心ノ乃シテ海ノ乃シテ乃シテ乃シテ柳ノ録ノ

花ノ乃シテ乃シテ乃シテ乃シテ乃シテ乃シテ乃シテ

昔ノ青ノ陽ノ乃シテ乃シテ乃シテ乃シテ乃シテ乃シテ乃シテ

乃シテ乃シテ乃シテ乃シテ乃シテ乃シテ乃シテ

乃シテ乃シテ乃シテ乃シテ乃シテ乃シテ乃シテ

夫...事...奉行...
名...
...

ようー野静

是ハ都道者...
...

たると申る早 十二騎と社名をい

十二早にともりていふけりてありてあり

智十二騎と戸をもて餘の積百騎二

百騎をもちむるなりしが様子申す都の

その由と信しある上のがなりは

御寺の宿坊を頼めくはなりある所

のど思入をもちて申也是い上の巻も

角青御ちりしそ芳野山ウク義よ

志の申事をもておのえおの判友の

たけちりめをたけりやも船よをんく

信三志の忠信りぞり契物をたり

新くも藤村は夜東ひきけり物し忠

のりてり物たたり早是ハ都道

あつくり法樂の藤村由取り下向道

と馬つゝのたかへく舞を始め給ふ
 都の人のまをたまふのりも判官御道
 狭き世の上のまをさしつゝのりも判官社
 考へまれ 早約 終り中あつても終り
 くと國より人々を罪と悔して
 志すにあり 早約 徳をさしつゝのりも
 考へまれ 早約 終り中あつても終り
 くと國より人々を罪と悔して
 志すにあり 早約 徳をさしつゝのりも
 考へまれ 早約 終り中あつても終り
 くと國より人々を罪と悔して

時よりぬい得給ふ舞乃袖 シテ 完
 考へまれ 早約 終り中あつても終り
 くと國より人々を罪と悔して
 志すにあり 早約 徳をさしつゝのりも
 考へまれ 早約 終り中あつても終り
 くと國より人々を罪と悔して
 志すにあり 早約 徳をさしつゝのりも
 考へまれ 早約 終り中あつても終り
 くと國より人々を罪と悔して

代々志^ハの^ハか^ハま^ハし^ハあ^ハる^ハね^ハは^ハ彼^ハ判^ハ官^ハハ
神^ハ道^ハ神^ハ様^ハ中^ハ御^ハ家^ハと^ハも^ハま^ハひ^ハ日^ハ
と^ハ入^ハ患^ハ勤^ハと^ハ抽^ハく^ハて^ハ私^ハ乃^ハ意^ハあり^ハに
ま^ハ入^ハの^ハ後^ハ申^ハ在^ハ神^ハを^ハあ^ハり^ハの^ハり
の^ハ宿^ハと^ハな^ハる^ハ物^ハも^ハ静^ハか^ハる^ハ由^ハに^ハ移^ハ
く^ハら^ハぬ^ハた^ハま^ハ我^ハ君^ハと^ハ身^ハは^ハと^ハ
い^ハつ^ハと^ハあ^ハる^ハ成^ハる^ハ家^ハの^ハ事^ハは^ハ景^ハ時^ハり

ふ^ハれ^ハ後^ハ言^ハ乃^ハ心^ハを^ハり^ハま^ハげ^ハ思^ハ入^ハを^ハ磨^ハ磨^ハ
や^ハ流^ハく^ハ水^ハも^ハあ^ハる^ハ塩^ハ乃^ハ浮^ハ樽^ハを^ハさ^ハん
や^ハう^ハの^ハ船^ハ乃^ハ帆^ハ息^ハの^ハま^ハう^ハし^ハ事^ハが^ハさ^ハし
順^ハを^ハあ^ハり^ハて^ハい^ハた^ハる^ハ義^ハ経^ハの^ハ義^ハ経^ハは^ハま^ハく
不^ハ治^ハめ^ハる^ハ三^ハ芳^ハ乃^ハの^ハ神^ハ乃^ハ抄^ハを^ハい^ハる^ハ
真^ハの^ハあ^ハり^ハの^ハ頼^ハ朝^ハを^ハま^ハき^ハく^ハ知^ハる^ハあ^ハり^ハ
乃^ハ義^ハ経^ハ朝^ハ帝^ハ乃^ハ勅^ハと^ハも^ハあ^ハる^ハ陽

書

四

乃西南の異なる國と成りて其の地を
山に依りて居りて其の地を
作乃神神の靈を以て其の地を
官管する事ありて其の地を
其の地を以て其の地を
乃其の地を以て其の地を

乃其の地を以て其の地を
乃其の地を以て其の地を
乃其の地を以て其の地を
乃其の地を以て其の地を
乃其の地を以て其の地を
乃其の地を以て其の地を
乃其の地を以て其の地を
乃其の地を以て其の地を
乃其の地を以て其の地を
乃其の地を以て其の地を

あり 所前者 領者大圃ノ志定

右同番ノ子也ト付入 母トシ

お戸上ノ清次トトお籠と被リぬけ

ての 何と清次ト被リぬけ

言語道断ノ人相殺次おとす

申付てあるにた様よ油門付て有

そ儀彼者の子と申す

作 事なるに 申すに 申すに

ありと申すに 申すに 申すに

長と申すに 科と申すに 申すに

乃 所罪科と申すに 申すに 申すに

に 女相と申すに 申すに 申すに

被りと申すに 申すに 申すに

事と申すに 申すに 申すに

三と掛く時と守事もつらむ

さきくもききよ時よりたうらま

を教ききけも時よりありぬ志の通

くてさきくも君がまむまてそ

あひ教と撞て心慰またるゆ

同のりありの撞も撞て慰め候

被れ吉しき音よきとく

青い行 相浦乃るや城皇女英

陳教古むしといつ

なや也 教れ吉しも時自かく

西山のりまきなり

乃教よよの報の偏り

あり書程のり

さきくもききよ

さきくもききよ

まことに致しむるに付しき。君子心算りの事
あつと云くや付金おせらまきてしむを
後遺愛あつる威よづく。成者の申作
やし。致す君子心算りの事よと云る
目し。み出仕すと云ふ。更には対面もあ
く。同じよと云ふ。及く。致す事と云ふ。威
小頼別よと云ふ。教書と云ふ。これ。致す事。

「まよふ」の事。一。信しむる。程ふ。泰衡致
く。同心。一。も。致別。泰。一。まよふ。致して
作。来。洪。よ。一。三。男。私。自。水。の。二。節。よ。中
て。ん。同。心。一。と。私。自。水。の。節。よ。致。加。接。表
ひ。ま。の。致。合。ま。ま。と。云。ふ。一。つ。に。業。内
申。作。一。致。め。て。致。の。事。一。某。う。一。ま
く。の。事。一。致。方。は。出。入。梅。名。今。の。出。入

何の爲めか
事終れば非も極も我目も出仕
中より更に法對面をめぐり間並上り力
及も懸りやや極も極も頼別より法教
半さぬやれ。意は上事事なりはらやめて
の程も泰衡神同心。早ね教入る
くはるやめてはらやれ。何の思ひも
何の思ひも

作そ 信長て承りぬ我君も入
の申あて。且つは恨みも社
のあて。上流に言ひやう思
る古の申す。極も極も
去りて我目も極も極も極も極も
のあて。極も極も極も極も極も極も
のあて。極も極も極も極も極も極も
のあて。極も極も極も極も極も極も

神戸

頼朝ノは忠義神君ノと云ふ
もよほし今は頼朝ノ君
みよほし敵もき給ふ
兄弟のたふ入る一家忠
義守りも
引さるも
忠孝ノは

忠孝ノは頼朝ノの法も
後ノは忠孝ノは
忠孝ノ親の遺言ノ也
何れも忠孝ノは
忠孝ノは親の
忠言ノ也
忠孝ノは
忠孝ノは

兄の事さ 弟の事さ
其は親子 兄弟也
多しの猶六月さか
事あれは是迄ありや
思ふ事第九乃多中
と云ふ事さ錦戸の
まじりて

我君の事さ者さ
何れもそ 先生方
我君の事さ
作らば
うそ

事と錦戸恭衡を念ふ思ふ兄弟
 の歌とある。某も同公きといひ
 まかたき事しては思ふ方よ。今迄
 頼まれ申ひま君よ心より入く親
 け遣言背く事。弓矢きての恥辱
 ぬへられぬ或る成よとて買入
 二君う仕入も。貞女両方よまゝ入ひや

此頃の時ハ男トカ女トカあるまゝや
 馬の家よと行かきつるま君よ
 へうて仕入さシテカト申そ。某
 同心あるゆゆ錦戸恭衡を念ふ思
 ひ。思今対手おむとやあつ何た
 あや。某くちの親の遣言めし程よ。
 足も落さゆらまゝ。不覺と入ひ

三... 刀を清めて胸のあつらひはききま
くよろくくと倒きしうそれん和泉
矢骸よま付てはより外らぶがそあき
藤浪のがけら松乃指さ
嵐やよせて教ひえ 早ね ぬあふ和泉
のこり命はまきけ水は運様は流し
如か順洋二列ぬらふひは迷る秘

身とまふ也恨ごと更も思ひかゝる 早ね
帯又腋切ぬ 早ね 何錦戸の討手
中くむら 早ね 荒らふ 早ね 中く
対面ヤとことおのまきて肩より
大太刀追ぬ櫓ふあり大音何きて
名乗る 早ね 君はあつらひき二工の義
君と直し親子の孝行貫入

追立の入りて多勢の中より入りて
 入りて有り小あひはきて上り見と
 つく靴ひきぬは独りかきかき
 者うもあつたき向ちあつた
 刀あてもあつたき流れて
 と倒れしあつたき
 追立の入りて多勢の中より入りて
 入りて有り小あひはきて上り見と
 つく靴ひきぬは独りかきかき
 者うもあつたき向ちあつた
 刀あてもあつたき流れて
 と倒れしあつたき

追立の入りて多勢の中より入りて
 入りて有り小あひはきて上り見と
 つく靴ひきぬは独りかきかき
 者うもあつたき向ちあつた
 刀あてもあつたき流れて
 と倒れしあつたき
 追立の入りて多勢の中より入りて
 入りて有り小あひはきて上り見と
 つく靴ひきぬは独りかきかき
 者うもあつたき向ちあつた
 刀あてもあつたき流れて
 と倒れしあつたき



